

## ポケツト ジャーナル

予定される。神を信ずる者も信じぬ者も、人類の叡知の結晶であるバイブルにもう一度ふれてみてはどうだろうか。

実行委員会事務局／神戸YMCA  
078-241-7201



★西欧文明の潮流にふれる  
ヨハネ・パウロ二世が来  
大ヴァチカン展

あなたも  
ボランティアに!!

誕生日  
ありがとう  
運動

この誕生日ありがとうございます。  
学生・労働者・主婦・老人……  
など多くの人が、自主的に活動しています。

活動内容は、運動全般にわたります。

①この啓発運動の企画・現在は講座や映画づくり、啓発図書の発行などをみんなで話し合ってきめます。

②全国各地の地域社会ボランティアとの連絡・月刊の「運動のしおり」の発送など。

③運動の事務・毎日到着する現金古切手の受付・お札のカードの発送。訪問者・電話の受付。

④古切手の分類・整理はほとんどが主婦で、平日の午後・月に四回目を決めてやったり、各家庭へ持ち帰ってやってもらっています。

⑤本運動発行の啓発紙や啓発図書の編集と発行・毎月発行している「運動のしおり」の編集など。

⑥ボランティアの研修・図書や映画などを教材に話し合いや施設見学会など。

⑦その他  
ボランティア活動ですから、入退はまったく自由です。それぞれの人が、自分のやることを自分で決めてやっています。時間も、自分がやられる時間にあります。

みなさんも、この機会に本運動のボランティアとして、参加してください。



神戸室内合奏団の結団式

★神戸室内合奏団が発足  
5月24日にコンサートを開催  
自治体が創設する初の室内合奏団として全国の注目を集めていた神戸室内合奏団がいよいよスタート。4月4日に市役所大會議室で宮崎市長らの激励をうけて結団式を行ない、5月24日には神戸文化中ホールでデビューコンサートを開く。

★「大聖書展」など聖書愛読運動を兵庫県で開催  
キリスト教界ではペントコステの聖日（聖靈降臨の日）を中心に毎年、聖書愛読週間を設けて聖書の普及に勤めているが、この期間に一つの県を単位とした聖書愛読運動が各団体の共同で展開される。今年度は兵庫県で6月7日から24日まで行われるが、主な行事は、「大聖書展」（6月19日～24日、そこう神戸店）作家の曾野綾子氏による記念講演会（6月19日、神戸国際会館）、佐古純一郎、高見沢潤一、山本七平氏による県内各地での巡回講演会、「聖書と生活」をテーマとした作品コンクールが

音楽監督には岩瀬竜太郎、京都市立芸大教授が就任し、バイオリン9名、ピオラ3名、コントラバス1名、チエロ3名の若手奏者16名で構成。世界にはばたく合奏団へと期待される。



ピオ11世の祭服

聖フランシスコ・ザビエルの遺骨、教皇冠、など歴代教皇使用の祭具、日用品など、門外不出の秘宝120点が展示され、世界で最初にして最後の催しと言われる

誕生日ありがとう運動本部  
641神戸市中央区御幸通八一六  
神戸国際会館1階の郵便局の隣  
二五二一八一六一内線三一六

絢爛豪華な宝物の他に、故  
コルベ神父やマザー・テレ  
サの愛の活動を紹介し、キ

一夫元神戸市長、加納竜一、花子、政雄各氏らによつて玉串が奉典され、故人の偉業を思ひ、

参加を呼びかけている。

このグループは'80年10月結成、現在会員数15名（男

美術  
ガイド



★厳肅な雰囲気で  
るには絶好の機会であつた

★子どもが躍動「一年一組  
せんせいあらのね」発刊

部光一さん。毎月第2、第4月曜日に喫茶店「サンモトマチ」で例会を開いてハ

神戸の港湾建設の先覚者

川床を整地して町づくりを完工し、今も「加納町」に名を残す加納宗七さん（明治20年没）の記念碑の除幕式が3月16日午後1時から同碑のあるフラワーロードで行われた。

ト「あのね帳」に書かれた詩と自ら撮った写真で鹿島和夫さんが編集した詩とカメラの学級ドキュメントが理論社より発刊された。

映画に関する情報なら何で仕事をしている人が多くもわかる、というのが特色で、一般より安く映画が見られたり、招待などの特典もある。会費は月300円である。西宮市青木町1-31水田文化2丁目まで。

せんせい あのね

### 皺かな除幕式

鹿島和夫さんは23年間の教師生活を通じ子どもの詩の実践教育に取り組み、すっぽんぽんの会、日本作文の会会員としても活躍している。著書に「たいようのおなら」(共著)がある。

石野　屋サマー・カーニバルが、芦屋JCの主催で、新しい街、芦屋シーサイドタウンの広場で開かれる。この祭は、最近見直されてきたフリーマーケット、京阪神の大学を集め、ミュージック・フェスティ

対談（灰谷健次郎 V.S 鹿島和夫）の構成、全228頁、定価940円。

石野屋サマー・カーニバルが、新しい  
街、芦屋シーサイドタウンの広場で開かれる。この祭  
は、最近見直されてきたフ  
リーマーケット、京阪神の  
大学を集めてのキャンバス  
・ミュージック・フェスティ  
バルそして第三部は、石  
野真子を招いてのショウタ

★映画ファンよ集まろう！

芦屋J.C.の主催で、新しい街、芦屋シーサイドタウンの広場で開かれる。この祭は、最近見直されてきたフリーマーケット、京阪神の大学を集めてのキャンパス・ミュージック・フェスティバルそして第三部は、石野真子を招いてのショウタ

アマチュア映画愛好家会

石野屋サマー・カルチャーパーフェスティバル

ちで作っているグループ、

石野　一二バルが  
芦屋JCの主催で、新しい  
街、芦屋シーサイドタウン  
の広場で開かれる。この祭  
は、最近見直されてきたフ  
リーマーケット、京阪神の  
大学を集めてのキャンパス  
・ミュージック・フェステ  
ィバルそして第三部は、石  
野真子を招いてのショウタ  
イム。  
さらに祭りを盛り上げよ  
うと、『芦屋の唄』の歌詞を  
広く一般より公募。宝塚歌  
劇

かに進められた。除幕のあと、お神楽が舞われ、中井

「ザ・映画—K O B E」が  
広く一般映画ファンに会員

劇団による振りが付き、当



●月刊神戸っ子20周年記念出版

# ALPHABET AVENUE

新井 満

〈文〉



石阪春生

〈コラージュ〉



二人の邂逅が火花を散らす

KOBEの摩訶不思議な幻想空間

〈アルファベットアベニュー〉

26色の道標。

●愛蔵本

26.3cm(ヨコ)×25.7cm(タテ)型

〈60頁ダブルトーン・コラージュ25枚入〉

¥5,000 (送料¥300)

協力 / 月刊神戸っ子 編集人 / 小泉美喜子

発行人 / 小泉康夫

発行所 / コミュニティサービス株式会社

神戸市中央区東町113の1 大神ビル7F

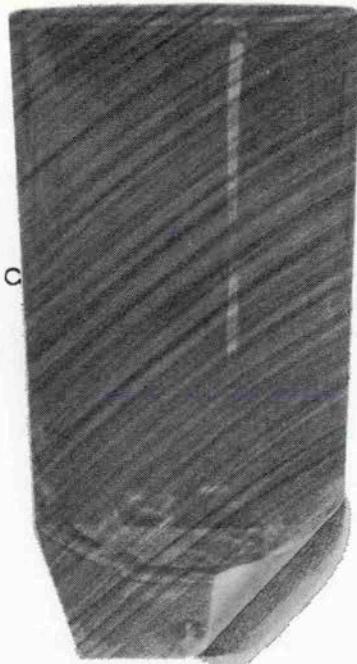
☎ (078) 331-2246 月刊神戸っ子内



# 流れる素描

久保田 匡子

絵／田中 一好



△ 5  
ふつとため息をついて肩を落とした弘子の、疲れをにじませた苦し気な表情に、範子は、技巧を払い落とした素顔を覗き見た思いだつた。

そう言われて見れば、布団の敷き方にも弘子の並大抵ではない気の配りが現われている。布団は畳の縁に沿つて狂いない正確さでもって敷かれ、ピーンと張ったシーツの隅も切りとつたように角が立つてゐる。磨かれてグ

ラスのよう輝いてる水差しは、寝そべった人の手が具合よく届く位置にある。

「そんなにじろじろ見ないでよ。恥ずかしくなるじゃないよ。でもどう?きちゃんとしたものでしよう。人間つて本質は変わらないものなのねえ。そら、あの寮時代に、

あなたと二人してせつせと掃除して回ったわねえ。まるで邪なものを籠で掃き出しているように脇目もふらずに、さア……それとも空襲の恐怖から逃れるためだつたのかしら……覚えている?」

「そうそう、そんなことがあつたわね……大方あなたに引きずられた形だつたけど……」

白い頭巾、白い上下の作業衣は工場に来てから各自が手縫いで縫つたものだつた。その略式着物のような不恰好なモンペ姿に、ブカブカの地下足袋姿の弘子が、丈の長い竹箒で一心不乱に堤の下の工道を掃いてる姿が浮かびあがる。工場と山奥の寮の間の往復だけで陽に焼けて、ただでも浅黒い弘子の顔は汗と油で黒く光つているが頬は赤い。弘子の頬はなぜそんなにはっきりと丸く赤いのだろうか、と入学して間もなく、絵本でしか見たことのない赤い頬をした女の子に範子は興味を抱いた。

「血液の循環が悪いということなの。健康だからじやないの、むしろ反対なのよ。悪い血が固まっているのよ。

だから手もほら!」急速に親しくなつたある日、元気そうだと感嘆した範子にあつさりと答えて、弘子は左右の手を前にのばして見せた。まだ幼い形を残している指から甲にかけての皮膚は、頬よりも赤黒くて、ところどころ割れて冬のひどい凍傷の跡をとどめていた。家では水仕事も一人前にやるのよ、と淡々と語る弘子に範子の頬倒は一層深まつていった……あの頃の弘子は十二歳とは思えない沈着なませた少女だった。それは前年に母を亡くして、小学生の二人の弟の世話をまでしているけながらなかつた……。

蒼白いような化粧でわからないが、きっと弘子の頬は

今でも赤いのだろう……と、自分の家を尋ねてきた時と違い、お白粉を塗っていない首や胸元の浅黒い皮膚に目をとめた範子は、初めて昔の友を身近く懐かしんでいた。

「……あなたもわたしも相当な模範生だつたわねえ。今思えば可愛いものね。あなたつて一人だけ皆勤で賞金までもらつたでしょ。先生の悪口ばかりも言えないわね。あんなに頑張つちやつて、後になつて何もかも空しくなるの無理はない。でも馬鹿みたいよ。癖というべきかしら、本性たがえずというのかしら、あなたも相変わらずだつてね、ご主人が言つてたわよ。律義で、堅物の見本そのものだつて。それに大変な掃除マニヤつて……」

動員時代のおのが姿を思い出して苦笑していた範子は悪戯っぽくも、真摯ともとれる弘子の大きな目をまじまじと見つめ直した。

「あら、何度も来て下さつていたのにお礼言うの忘れていたわ。いいご主人じやないの。純情で……あの方つたらねえ、酔つたら戦地の話ばかりなさるのよ。あなたの友だちは戦争以外の話はしてはいけないと決心なさつていらつしやるみたい。でも、わたしは夜毎の猥談に食傷してるでしょ。それに軍隊にはいつた兄も主人もいないもんだから夢中で聞いちやうの。動員時代を思い出すしねえ」

「厭な人ね、お酒を飲んでまでそんな話をするなんで夫の不始末の繕いをする妻の態度は取りたくなかつたが、範子はつい険しい口調になつた。

「いいじやないの。お酒を飲べばこそよ。それでうさを晴らしてられるのよ。ほんとに、兵隊さんの恨みつらみは深いわね。わたし、よくわかるわ。火薬工場で将校や下士官つて結構なご身分だつてこと知つていたけど、実際の軍隊ではもつと権力的だつたのね。ひどい話をうんと聞いて、わたしすっかり将校嫌いになつたわ。断然いやね、あんなの……ご主人の恨みが乗り移つたみたい……女の子たちにも良い薬になつてんのよ。あの世代つてテレビなんかの戦争ものを見て、恰好いいって言つた

りするのよ。そいで二人とも驚いてるわ。家ではなさらないの？そんな話……」「聞き手が二十年来の古女房だもの、新鮮味がないのでしょ」

登はときおり軍隊の話はする。結婚以来ずっと続けてきた習慣のようにして。けれども近頃、彼の話をどれだけ本気で聞き取っているだろうかと、範子はふとたじろいだ。

「そうかもね。おとといはね、おかしいったら。わたしもへべれけになつて意氣投合してたら、ご主人とうとう泣き出しちやつた。強行軍で置き去りにしなくちやならなかつた戦友のことだつたの……純情ねえ、感激したわよ」

弘子が手放しで登をほめるのにつれて範子は次第にいらいらとしてきた。馬鹿げていると思った。登のやつてることは、戦友会の集まりにあれこれ難癖をつけながら、結局は出掛け行くよりももつと愚かな行為ではない。

彼女は登が弘子のもとに再三来ているのに、一言も触れずに隠していることに抑えきれぬ不快を感じていた。そうして一方で、この前一人が話題を探すにも事欠いて、自分の火傷の跡を持ち出していたのを思い出して、やり切れなく、みじめな気持ちに落ち込んでいた。弘子はうわべはほめているが、内心では酒場に来て軍隊時代の話しか出来ない登を嗤つているのではなかろうか。弘子はまた、独り者の皮肉な目で、そんな腑甲斐のない夫に縛られて生きている友をも嗤うことが出来るのだ。

「ママさん。お電話！」

階下から歌うように女の子が呼んだ。

「ちょっと失礼ね」

と弘子は、くねくねと体をくねらせて範子の横をすり抜けて行つた。ツン一と刺激のある香水の匂いが鼻をついた。匂いは部屋の中空に静止したまま容易に散つていかなかつた。

主のいない部屋で、範子は赤い寝具と対決するようにして坐つていた。もし支配人というのが弘子の愛人だと仮定しても、ここに感じられるのは愛の秘めやかさよりも献身的な忠誠心だった。常に布団を延べておかなければならぬということにも、弘子の厳しい生き様が示されているのではなかろうか。

範子は真紅の布団に横たわる一人の男を、暗い暴力的な背景で捉え、弘子のあれからの二十六年をそこに重ね合わせた。

△現実を直視しない感情はしょせん遊びに過ぎない――△という弘子の言葉を覚えている。少女のたわいない思つきの言葉ではない。明日をも知れない生活の中で必死な思いで生きなければならなかつた人間の言葉だった。確かに弘子は変わつた。しかし、これが弘子の現実であるとすれば自分は信じなければならない……弘子を信じるのか、現実を信じるのか、そこに違いがあるのか、またないのか。範子はしだいに薄靄に包まれるような模糊とした思いに陥つてしまつた。

「困つたわア、支配人が来るのよ。もっと遅くなるはずだつたのに……」

いつの間に來たのか、あがりがまちの所に姿を見せた弘子は、柱に寄りかかって立つたまま言つた。

「あなたと今日はゆつくり話し合つたのに……」

「いいのよ、また会えるわ、いつでも……」

範子はあわてて、今さつき脱いだばかりのコートを着て立ちあがつた。そのあわただしい動きを制止するようになに、

「あの時ね……」

と、しんとした咳きに近い弘子の声だった。

「……あの時。敗戦の日よ。やけどをしたあなたに悪いからあまり言わなかつたけれどね。とっても嬉しかつたのよ。これから本当の人生が始まるんだつて……何もかも厭になるっていうのと矛盾はしないわよ、あの日の例えようもない自由な気持ちというものは……」

弘子はむきあつた範子から目を逸らせて言つてゐる。

昔、大切な心の内をあかす時、誰も見ていらない様子で、己にさとすが如く語りかけた癖はそのままだ、と範子は引き入られるように聞いていた。

「こんなこと言つて現在のわたしを悔やんでいるのじやないのよ。わたしは自分に満足しているわ。自分を一

番大切にしてきたつもりだわよ。でもね……つらい時もあるのよ」

それはそうでしょう、とおさなりではない同情を籠めて頷いた範子をはぐらかすように、

「いえね、あなたを追いたてるみたいでつらいのよ」と、がらりと調子を変えて弘子は、崩して着付けた衿前に右手を差し入れて、思わずふりに呟いた……



階上でパターんと扉が激しい音を立てた。また登の鬱屈が始まつたと範子はうんざりするが、じっと坐つていられず豌豆をむいていた手を止めて腰をあげた。原因はすぐには思い当らない。彼女は最近登に対して何をどのように言えばよいか自信を失なつてゐた。この前機嫌がよかつたからといって、同じ内容の話をしても無事にするとは限らない。今取りかかつてゐる空調器の設計図がうまく引けず、きりあげて昼過ぎから家に帰つていてのだが、さして苦にしてゐる様子ではなかつた。復員して以来、転々と移つた後にやつと落ち着いた小さな会社だつたが、設計図を引く技術も曲がりなりにマスターしていく、今では一番の古顔でかなり勝手な行動も許されてゐる。人付き合いも悪くなく、会社ではむしろ好人物と見られているらしい登の、家庭の中ではむしろ好人物である。

範子は過ぎ去つた事象のあれこれの中から、登の憤りを触発したものの正体を、息をつめるような緊張をもつてとらえていた。お茶を入れて休んでいた時のこと、姉が庭の手入れをしていた。十坪あまりの狭い裏庭には蘭や青木、椿、五月などの常緑樹が、お互いの瘦せた枝々や褪せた硬い葉先を心許なげにさし交わしている。冬場は一筋の陽光も落ちず、水はけも悪い土壌は常にじめじめとしてところどころに苔も生えている。華奢な草花は育たなかつた。

「寒肥料には遅いのだけど……」

姉はガラス越しに眩しそうに目を細めて笑いかけ、背

丈よりも大きくなりた青木の根元にしゃがみ込んだ。

「姉さんが手入れしてくれるからいいようなものの、わたくしたちだけだったら目も当てられないわね」

庭など持つても雑草が生えるにまかせるだけだろうと、日頃から語り合っている素地があつたので範子はよくは考えずに言つた。

「自分の庭だからご随意さ。いつでも手入れぐらいは誰にも気兼ねなくやれるさ」

「でも働かないで眺められるのは楽しやないの」

「眺めるほどの庭ですかい」

「それでもいよいよはましだわ。もし、これっぽっちの縁でもなかつたら、それこそこんな所に住んでいられないと思うわ」

姉に聞こえぬように範子は低い声でたしなめながら、またしても会話がある一定の方向に傾いていくのを绝望的な気持ちで感じていた。必要でもない話しかけを止めない習性への罰だろうか。

「渴れど空きの水を飲まず、さ。知つてゐるかい、この言葉を」

「そんな……じやどうすればいいの。この家を捨ててマンションにでも移りますか？」

「ひとごとみみたいに言うんだな。うちにマンションを買うだけの余裕がないのを知つていて、くそ落ち着いてやがる」

その時の登は薄く笑つていて、範子には苦笑しているとしか映らなかつた。

自分たちは、この家を出ることを真剣に考えねばならない時期にきいてはいけない。賃貸でもどこかのアパートに引越して、姉との日常から離れてしまわねば、登の鬱屈はますますひどくなるのではないか。けれども姉を淋しい境涯に置き去りにするだけの見返りが、確実にもたらせられるとは考えられない。それにもましてこの家を出ることは、登に従つて当てもない彷徨に踏み出すことだという恐れに似た不安に憑かれて

しまう。

あの時のことを範子はさまざまと思い出す——

登はそれまで熱心にしていた製図の練習を急に止めたかと思うと、簾窓からオーバーを出してもぞもぞと袖を通し始めた。

「どこへ行くの？」

そばで編物をしていた手を休めて範子は尋ねた。来月に迫つた二番目の出産への準備だつた。

「うん、ちよと、そこまで……」

煙草でも買いに行くのだろうと範子は気もとめなかつた。二時間あまり彼女は平静に待つていて。足をのばして繁華街の本屋へも行つてゐるのだろうと思つた。やがてバラバラと雨が屋根のトタンを叩き始めた。夜だった。傘を持たない登をどこへ迎えに行けばよいかと思案してゐる範子の前に、寒さにそけた顔をした登が帰つて來た。頭髪は濡れそぼつて額に巻毛のようになつて貼りついている。

「なアに、自動車道の中央でずっと立つてゐたのさ。車が運よく擦いてくれないかと思ったのだ。それなのにどの車も避けて走り去つてしまつた。うまく行かんもんだ」

冗談ではなかつた。努めて平然としている登の、雨滴が細かく光るオーバーの袖口や、寒そうに立てた衿元から冷氣が危機そのもののごとく立ちのぼつてくるのを範子は慄然として感じ取つてゐた。

喧嘩をした後でもなく（その頃、範子は登と争つた記憶はない）まして二人目の子供を持とうとしている矢先の、登のこの夜の行動は不可解といふ他はなかつた。範子はめまいのようになつてくるショックを必死に抑え込んだ。鈍く、重い痛みをともなつて体の内側から呼びかけるように蹴り続ける子供を、この理不尽な攻撃で些かでも傷つけてはならなかつた。

△△△△

# 神戸女流文学賞作品募集

小説は昭和51年に創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。これを機に有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動の一層の発展のために微力を尽したいと願っております。過去の受賞作品は次の通りです。

○第一回神戸文学賞「島之内ブルース」(田嶺新二・尼崎市) 同女流文学賞「バットの背景」(小倉弘子・大阪市)  
 ○第二回神戸文学賞「捨てて」(奥野忠昭・大阪府柏原市) 「生活」(吉峰正人・神戸市)(この回の神戸女流文学賞は該当なし)、神戸文学賞を二作が受賞)  
 ○第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」(蒼電一・奈良市) 同女流文学賞「夢の消滅」(大原由記子・高知市)  
 ○第四回神戸文学賞「溶ける闇」(高木敏克・神戸市) 同女流文学賞「影と接する」(田口佳子・伊丹市)  
 ○第五回神戸文学賞(該当なし)、同女流文学賞「痕跡」(久保田国子・大阪市)

ここに第六回文学賞を公募するにあたり、多數の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

## △募集要項

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者で

応募作品は一篇に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。

一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。  
 一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題(創作主旨)をつけて下さい。  
 一、締切りは八月一日(当日消印有効)

☆なお、選考は小説ならびに小説が依頼した選考委員によつて行います。

一、入選発表は本誌昭和五十七年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。  
 一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、入選作品の著作権は本誌に属します。  
 一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市中央区東町一-一三の一大神ビル七階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。  
 電話〇七八一三三一-一二二四六

受胎

吉本 惇見

え／小西 保文

し



デナはその後、何人のローマ兵と交わったことである。彼等のほとんどはこのテベリヤの町に駐屯するローマ本国の部隊員であり、さもなくばこの湖の周辺の町や村の駐留地から保養にやつてきた兵隊たちであった。そしてある者は「かわいい牝ロバ」の譬どおり、ひどく丁重に彼女を扱い、ある者は恐ろしく乱暴に彼女に対した。

しかしデナの前を通りすぎていった男たちに唯ひとつ共通していたことは、彼女の部屋に入るや、彼等が直ちにドアの外で恭しく着用していた一切の地位や衣服を投げ捨てすべてが獸であったことである。男たちはすべて好色であった。「かわいい牝ロバのいる館」では肉体とそれを貰う金錢のみが唯一の尺度だった。

こうして、デナは男の性的の姿を実感した。それは彼女が

父や兄とともに過ごしたベタニヤ村の生活からは決して想像もできなかつた人間の冷厳な事実であった。彼女の隣室にいるエミマは仕事が終わつたとき決まってローマの小粋な杯を片手にデナの部屋を訪れ、力なくベッドに横たわつている彼女を口ぐせのように慰めたものである。

「愛情なしでいいちまいな」

そういうつてローマの杯になみなみとついだ蜜入り葡萄酒をデナに差し出し、時には大仰に膝をポンと叩いたものだ。

「おお、ぶどう酒よ、おお、この地上の喜びよ！」

すでに酔いが全身を快く支配しているのか、エミマはベッドの上で足をひろげ詩篇の一節を大声で唱えては笑い転げた。

「おお、オリブよ、おおナルドよ、お前たち、その顔をつややかにする香油よ！ このエミマさまも、からつきしお馬鹿さんじやないんだよねえ。いまじやローマの牡馬どもに、こちらだつて結構楽しませてもらつてゐるのさ」

過越祭で賑わう聖都の雜踏をあてどなく徘徊し、デナがふたたびアントニヤ城に通じる狭い石畳の道にさしかかつた時だつた。飾り毛のついたローマ兵の胄が、デナの眼をつよく射つた。だが、なにより彼女に不吉な予感を喚起させたのは、そのローマ兵を取り巻く群衆の姿だつた。ある者は両手で顔を覆い、ある者は拳を振りたて奇声を張りあげている。獲物をとらえた狩獵者のように得意顔の男もいれば、無表情に剥げた石壁にへばりついている女もいる。群衆の視線が多様であればある程、そのものが不吉であることを、デナは父の事件以来、本能的に悟っていた。

彼女の横を走り抜ける二人の男の叫ぶような会話が蠟燭の炎のような形をした石柱に反響し、彼女をはげしく捕えた。

「いよいよ、磔刑がはじまるぞ！」

「囚人は誰だ？」

「あのラビと、二人の強盗どもだ！」

「ひよおつ、あのラビって、イエスとかいう野郎のことか？」

「神の子を自称する野郎の死にざまが見ものだ！」

陰気な僧服に身を包み、一目でそれとわかる祭司の男と外衣の裾に豪華な刺繡を施した小肥りの男とが無器用にデナの横を走り抜けた。彼女は反射的に、二人の男の後を追つた。後を追ひながら今朝はやく、まだ夜の明けきらぬ闇の中で、トマスが短剣をとり喘ぎながら口にした忌まわしい言葉がそのまま眼前の事実となつて群衆の目に晒されていることへの覚悟を定めた。

真昼に向かう白い陽光が行列の先頭を歩む泣き女たち

の空音と混ざり合い、人々の皮膚を鈍く照らす。停滞して進まぬ行列と、狭い窮屈な石畳に苛立ちながらローマ兵のまたがつた馬が上下に激しく首を振る。さまざまな群衆の熱氣と赤ん坊の泣き声とに挾まれ、あのラビが両手をつき、死に赴く家畜のように石畳の上に跪いている。そのあわれな生き物の胸の筋肉が頻に波打つ。血の滲んだ上衣の上に、鉄片を細工したローマ兵の鞭が容赦なくはねあがる。ラビの背中が、そのたびにまるく曲がる。

「もっと打て！」

「打つて打つて打ち殺せ！」

視覚が喚起する興奮に、あらゆる顔が酔つてはいる。階層をこえ年齢をこえて、顔という顔が熱い好奇心に踊つてゐる。

「ひよおつ、ユダヤ人の王様！」

「神の子なら、お前さん自身を救え！」

ついいましがた神殿で姿なき神にぬかずいたにちがいないその同じ眼が、今は自称「神の子」を嘲つてゐる。神殿に在す彼等の神は全能であり、彼等にはその逞しい神がこれほどに貧弱な男を生み落すなどとは考えるのも汚らわしい。神は厳然として至聖所に座し、その神によつて使わされる救い主は、きつといつか虹の上に、天使と天の軍團とを従えて彼等の栄光を現わすに違ひない。

「立て」

鞭を手にしたローマ兵が頸をしやくりあげた。忠実にその命令に従おうと、血の滲んだラビの手が十字架の横木を掴んだ。

痩せ細り黒ずんだ手が必死に力をふりしぼり、背丈よりはやや長いその横木を担おうとする。

「ひよおつ、いいぞ、ユダヤ人の王様！」

「お前さんの家来どもは、どうした！」

「王様の家来にも、かつがせろ！」

糸杉の柱を猫背の上に乗せ、ラビはやつと立ちあがつた。彼は俯いたまま横木を引き摺り、両手で柱をもつたまま左右によろめいては少しづつ前に進んだ。

不揃いな石畳の一枚一枚を確かめるように糸杉の柱が  
鈍く不規則な音を刻みこみ群衆の好奇に呼応する。ラビ  
のすぐ後にづく二人の盜人たちにはまだローマ兵の命  
令に聞き従う余力があり、彼等は柱を引き摺ることなく  
肩にしつかりになっている。いま群衆の注意はただラビ  
の上に注がれ、その傷ついた家畜の姿だけが人々の熱狂  
を喚起する。

王様！」  
デナの横で顔を剃り髪のない男が女のような聲音で嘲こわね。

「冠がすてき！」  
りなじつた。

さきほどまでローマ兵の手にしていた茨の輪が、肩にまで垂れたあのラビの髪の毛の上にいつのまにかのせら

れている。デナはラビのもとに近づきたかった。小突かれ押しもどされながら、群衆の只中を必死に突き進んだ。

やがてラビの横顔がローマ兵の肩越しに間近に見えた時、デナは一瞬、体の中心を淵じい絶望感が閃光となつた。

て駆け抜けるのを知覚した。涙が頬に溢れた。あまりに急激な内心の葛藤に、デナはどう対処してよいかわから

血痕のために小さく固着した肩の上の髪の毛、糸杉の柱  
なかつた。痩せこけた頬、紫色に腫れあがった鞄のあと

にからまるほそい枯枝のような二本の腕 ごめがみと  
わざ鼻すじといわざところかまわざ皮膚のうえを伝い達

れる血液と汗、落ち窪んだ眼孔、折れ曲がった体躯、衆のどよめきと静寂、武装したローマやシリヤの兵士た

ち、小鳥のように怯えた子供たちの視線。それらの一つをどのように結びつければよいのであろう。いや、

それらの一々へが、何故いまここにあるのである？つい二日前、ラビはベタニヤで静かだった。その頬は丸

みをおび、艶やかだった。ナルトの香りを漂わせたそのふくよかな髪は、貧しい素焼きランプのもとでさえ白く

美しく光っていた。なのに、ラビはいま血と汗とを滴らせるながらあらゆる光を失い、力なく歩む。これら二つの光景を、どのように結びあわせればよいのであるう。そ

してあの夜、ベタニヤの村でラビを取り囲んでいた險しい眼つきの弟子の人たちはどうしたのであろう。あのトマスやタダイたちと同じように、彼等もまた一人残らずこの聖都から逃亡したのであろうか。ラビはいま二人の囚人とともに、糸杉の柱を引き摺り、聖都の石畳を黙々と歩みつづける。

血と汗の零が一層はげしく鼻筋や首筋を伝わり流れた。彼に寄せられている同情の眼は皆無だ。母親に手をとられ、石を投げつけられた小鳥のように怯えていた子供達でさえ、もう悲高い声で彼を誘う。

—エタヤの王様！

「奇蹟は起きないの、神の王子様！」

鉢の音がした。テナは必死にこらえた。たゞうなづかく、どうにかして、男の領域に、女が手出しどのように悲惨な光景であれ、

してはならないのか。四年前、父ミヤコが元野辺道主にされたのも、神とこの父系社会との間に取りかわされたものだ。

厳然たる勢結いの下に、かくかくと、  
の地上との契約は、つねに預言者によつてのみ語り伝え

ラビの担つていた横木が石畳の上に転がり落ち、ラビ

するく由がる

たまま、胸の筋肉を不規則に痙攣させていた。

「打って打って打ち殺せ！」

「靴をやめろ！」

前で、鞭をもつローマ兵をどなりつけた。胸あての影たるデナには、いま命令を下した男が百卒長である。

がすぐにわかった。

「水をやれ」

テベリヤでも、ローマの百卒長はなぜか優しかった。

十字架に手をかけていたシリヤの奴隸兵が、あわてて自分の腰につけていた皮袋の栓を抜き、ラビの口元にあてがう。そのラビの鼻筋を、汗とも血とも水ともいえぬ液体がしたたり落ちる。

「あれで、しゃれこうべの丘にまでゆけるのかしら？」見知らぬ女がデナの横で、彼女に話しかけるように呟いた。

ラビは首を静かに横に振り、ゆっくりと百卒長を見あげた。血と埃とが醜く付着した顔の中で、その瞳だけがまだのガリラヤの湖のように青く深く澄んでいた。堰をきつたように、デナの眼に涙がとめどなく溢れた。

「かわいい牝ロバのいる館」の禁を破り、デナがローマ兵の子を生み落したのは、彼女がテベリヤを見るおよそ一月前のことである。「館」ではいかなる懷妊も放置してはならず、堕胎するためのさまざまな方法を講じねばならぬことが鉄則であった。しかし彼女は自己の受胎をはつきりと自覚した日、故郷ベタニヤの情景とそこに佇む父シモンの面影がまるで白日夢のようにならぬまま、彼女に向かって押し寄せてくるのを感じた。

時に貧しい夕餉をとりながら、時に秋の澄んだ日射しを受けてオリブ油搾りの石臼を牽きながら、父シモンは口ぐせのように娘に語った。

「デナよ、女と百姓が、生命をはぐくむ。ただ神の光を畏れておくれ」

時にはパンを裂き、時には両手いっぱいにオリブの実を抄いあげて、父はそれを祝福した。しかし父シモンといえども、娘のこの胎の実だけはどうして祝福することができよう。穢れた女の穢れた胎の実は麦の穂にまじる毒麦のよう、まだ穂の出ぬうち煉獄の炎に焼きはらわれるがよい。

しかしデナは隣室のエミマにその懷妊を悟られたとき、たとえ自己の宿す実が毒の実であろうとも、その胎の実を守り育むことへの執着が毎日につよく彼女の内に湧き起つてきていたのをいかんともしがたかった。

「そんな芽は、はやく摘みとったがいいよ。少しく



らい小銭をためたからってさ、あんた丸裸になって、こ  
れからどうやって生きくといふんだい？」

エミマは熱心にデナを庇つた。

「それにさ、はじめは少しつらいけどさ、なあに一度目  
からはもうへっちゃらになるもんだよ。それもこれも、  
かわいい牝ロバの宿命というもんさ」

デナはしづかにかぶりを振つた。

「わたしたち、もう決めたの。ありがとう、エミマさん」  
その覚悟した口調に、エミマはかたく貝のように口を  
噤むはかなかつた。

「わたしたち、長く生きてはゆけないかもしねい」

ふたつの眼を大きく見開き、エミマは呆然とデナを見  
詰めつづけた。

たしかに「館」を追放されることは、直ちに死を意味  
するに違ひない。それでも、デナは生みたかった。はじ  
めての胎の実を、どうしても育てたかった。たとえそれ  
がローマ兵の子であれ、シリヤやフェニキヤの奴隸兵の  
子であれ、デナは生涯に唯一度、生命の讃歌を奏でたか  
つた。いや、母の死以来、何と多くの不幸が彼女の傍を  
通りすぎていったことだろう。それら一切の不幸とこ  
にきてようやく獲得した現在の生活にかえて、いま胎に  
宿る小さな生命を守り育てることは、彼女のこの現実に  
対する最後のささやかな抵抗であるにちがいなかつた。

「女と百姓が、生命をはぐくむ」と父は語つた。たとえ  
東の間であれ、生命への讃歌をたからかにうたいあげか  
みしめること、一人の女の過去の傷痕をつぐなうに足る  
これ以上勝利ある出来事がどうして他にありえよう。

エミマは彼女のために、堕胎に関する一切の面倒は自  
分がみると「館」の主にかけあつてくれた。

「もし堕胎が成功すれば」

「館」の主は腕を組みエミマを見てやりと笑つた。

「規定どおり、デナには十日間の休暇を与える。それにお前にもだ、エミマ、特別にな」

「館」の主にかけあつた日の夜、エミマはいつものよう

にローマの杯を片手にデナの部屋を訪れ、デナの下腹部  
をポンと敲いた。

「あんた、乾杯だよ。乾杯！　あとはさ、その子の元気  
な産声をきくにいい場所を、はやく見つけておくことだ  
よ」

エミマは蜜入り葡萄酒の杯をデナに手渡し、ベッドの  
上にどつと大の字になつて転がりこんだ。

「今日の牡馬ときたらさ、あんた、あたしのしもの血が  
榮えあるローマ帝国の胃を汚したつて、それはもうひど  
く悪態をつきやがつてさ。ふん、なによつ、あたしやね、  
ローマの千卒長ユリアスさまにじきじきいいつけてやる  
と脅かしてやつたのさ。そしたら、あんた、その牡馬と  
きちや、胃のかざり毛についていたあたしの神聖なしも  
の血をあわててペロペロとなめはじめたんだよ。かりそ  
めにも、世界に君臨するローマ帝国の兵士がさ」

テベリヤの湖岸に近いとある粗末な貸家でデナが見事  
な男児を生み落したのはその数か月後であった。みどり  
児は、まだ春にはやいアダルの月はじめ、一人の年老  
いた産婆だけにつきそわれて勇ましい産声をあげた。赤  
ん坊は産着にくるまれはしたが、家族の祝福やユダヤの  
習慣にもとづく嫡出子の認知を受けることもなく、唯母  
親の熱い眼差しだけを注がれたのである。

母はその日、終日、生命の讃歌を奏でつづけた。幾筋  
もの涙が零れ落ちた。これからさきの生涯に、これ以上  
の歎びが訪れるることはもうないであろう。新しい命を、  
今日、私は生んだ。むろんそれは長い過去の不幸を埋め  
合わすには余りにささやかな歎びであるかもしれない。  
しかし人生における幸福も不幸も、おそらくはこのよう  
に何げなく一人の人間の横をつぎつぎと通り去っていく  
のだ。

彼女は昔見た玩具のように、母の横でやすらかに眠り  
入る小さな生命をじつと見守りながら、これから的人生  
への覚悟をはつきりと思い定めた。

(つづく)

## ★神戸つ子トラベルコーナー

ハーバード大学

訪れるスペシャルヨーロッパ

パリ10日間（大丸特別企画）

331-8121 担当／大畠  
★ニユーヨークフリー8日間

までのことなたでも。  
お問合せ・お申込みはトップナット  
チ(中央区琴緒町5-3-5グリ  
ーンシャボービル2階)  
TEL 242-2636

talk and talk



『神戸の子愛勝者井口』

★前略、前に東灘区本山に住んでいました者で、2年前に「神戸女子」を送っていた間合。今 日テレビで「ポートビア」の関連を見た、長治さんの話を聞いていたら、またぜひ「神戸女子」が読みたくなりました。

田辺聖子さんの『聖子の白百合』が、絵も文も好きで、新井満先生と石阪真生さんコンビの再びアルファンベットアベニューや『Venue』が、美少年の美と運命的な神秘感が美しかったです。▲宝塚／丸本明子▽

★神戸っ子編集部のみなさん、祝  
ってください。私はピッカピカの  
神戸大学教育学部の一年生。広島の  
に生まれ育ち、この春でめでたく  
神戸っ子編集部のみなさん、祝  
ってください。

今回、吉田の芝居「出航」に一同全力をあげて、良いものにしようとがんばっています。ご期待ください。  
ぜひ見に来てくださいね。

前回の上演にいるいるの教えで、戸情宣をしている最中ですが「神戸っ子」さんのお陰だなあと感じます。私も多く、感謝感激の連続です。制作のチーフをやっていますから、京都や大阪の各地(?)をいろいろと見て回ります。吉田の芝居「出航」に一同全力をあげて、良いものにしようとがんばっています。ご期待ください。

「現役」で4年間、やっとの「引退」が御決まり。今、やっと生活に慣れを感じています。「神戸」の「子」との出逢いは、さんかか街の本屋さんで下宿探しに役立つか、と買いたいがかりで、それには役立たず、やがてカルチャーナーで女性週刊誌で識っていた神戸とはお逢い、不慣れな神戸での下宿生活、親しき友と出逢ったときの興奮と、同じです。将来は小学校の先生になりたい、

お問合せ・お申込みは近畿日本ツーリスト神戸海外旅行営業所  
391-2401

2、	ウイーン・パリ 8日間
出発日 / 6月4、18日、7月9日	
3、	マドリッド・パリ 8日間
出発日 / 6月13、20、27日、7月4、18日	
4、	ミュンヘン・パリ 8日間
出発日 / 6月9、16日、7月14日	
5、	アテネ・パリ 8日間
出発日 / 6月13、20、27日、7月4、18日	
6、	ローマ・パリ 8日間
出発日 / 6月4、18日、7月9日	
費用 / いずれのコースも	

パリ10日間（大丸特別企画）  
日程／第1便 6月18日～27日  
第2便 7月2日～11日  
費用／  
398,000

電 331-8121 担当/大畑  
 ★ニユーヨークフリー8日間  
 出発日/6月4、11、18、25日  
 費用/4258、000

★5月の国鉄会員旅行  
1、やすらぎの日光と上州の旅・  
2泊3日

二ノ丁目 大阪→ブルックブルート  
ライ川遊覧→ハイデルブルグ→  
ルクセンブルグ→ベルギーのシナ  
ト→ホテル(泊)→ブルージュ→バ  
リ→大阪  
オブジニアナルツアーロアール河  
畔の古城めぐり ¥2,400  
(フランス料理込み)  
お問合せ お申込みは大丸トラベ  
ルサロン(大丸宇品店6階)

★ロマンあふれる南海のバラダイス、タヒチ8日間  
費用／￥37,800  
★キャンベーン、ハイワイ4泊6日  
費用／￥16,900  
★ WORKING HOLIDAY IN AUSTRALIA

温泉・2泊3日  
出発日／5月22日、6月5日、19日  
白根火穴・大原野・長野・志賀高原  
し・櫻名湖・伊香保温泉(泊)・櫻  
名神ハイウェイ新大阪  
費用／おとな￥5,400  
子ども・￥4,000  
お問合せ・お申込みは三ノ宮駅駅  
行センター電221-0190

（身代）も御前に決まり、やつと  
生れに慣れました。」「神戸」つ  
子」との出逢いは、さんちか街の  
本屋さんで下宿探しに役立つか、  
と貰い求めたのですが（それは  
役立つ）否やカルチャーフィー誌です  
（身代）なつかず旅館など、女性週  
刊誌で識っていた神戸とはお会遇  
い、不慣れな神戸での下宿生活  
親しき友と出逢ったときの興奮と  
同じです。  
将来は小学校の先生になりたい  
と思いつつですが、こんなタウソ  
誌にたずさわってみたいとも思っ  
たりもして……。「神戸っ子」を  
通じてコウベのカルチャーを吸収  
してやろうと意欲満々、今後とも  
どうかよろしくお願ひします。編  
集部「どんなんううなのだからとお  
興味津々、近いもううなのだからとお  
訪ねします。△広島／宮川チエ△